

# むさし野

No.32

事務局 〒350-0822 川越市山田912-7 石井方

電話 049-225-2466

E-mail:ishii.0525@r8.dion.ne.jp

ホームページ：<http://www.longview.jp/musashino/>

## 年頭に当たり <sup>よわい</sup> 齢を重ねて思うこと

鹿野幸作（千葉県千葉市）



既に古希も過ぎ、最近では身体機能の衰えを感じるようになってきた。人生のレースなら最終コーナーを回り、最後の直線コースに入ったところである。ここで、これまでの長かった人生の結果が出ることになる。その結果をどのように考えるかであろう。

さて、これから注意すべきことは、老齢化に伴う病気である。特にがんと認知症。がんは日本の高度な医療技術を信じるとして、問題は周りの人に迷惑をかけてしまう認知症である。認知症にならないように、あるいは認知症の発症を少しでも遅らせるように、いつも若々しい脳を保つよう心がけている、身体老いれど気持ちのうえではまだ若いつもりである。この若いと思う気持ちこそ若さのひとつの秘訣かも知れない。

ある学歌に「生きることは学ぶこと、学ぶのはたのしみ、生きることは知ること、知ることばよろこび、知は光」とある。脳は知らないことを知りたがるそうである。そのために最近では大学の公開講座やシンポジウムに積極的に出席し識見を高めようと研鑽に励んでいる。また幸いに知人が多いことから懇親の場が多く、その中での楽しい会話から学ぶことも多い。

また出かけることにより、電車の中や街で行き交う人の最新のファッションを目にし、そしてそれとなく聞こえる会話の中にも役立つ情報が込められており、しかも刺激にもなる。

最近の脳科学の本によれば、年齢に関係なくつねに好奇心を持ち、また、脳を働かせるような生活をすれば脳の各部位が活動し脳の機能が向上することが実証されているようで、これは本を読むだけでも脳が活性化し、効果があるということである。

健康であれば脳の働きがそれほど衰えることはないというので、無理のない適度な運動で血流をよくし、血流がよくなることは当然脳の血流もよくなるので、軽い運動は続けたいと思っている。そして、単なる長生きではなく、如何に健康寿命を延ばすかにかかっているので、健康には十分気をつけたいものである。

私は仕事や趣味に一生懸命に打ち込む人に敬意を表したい。その真剣な眼差しは何と美しく輝いていることであろうか。最近になって特にそのように思うようになってきた。

人は誰でも健康で生き甲斐のある幸せな人生を送りたいと願っている。私もこれからの貴重な人生を悔いなきよう生きたいと思っている。

## 第16回勉強会 盆栽村と大宮氷川神社散策

「おはようございます」。東武野田線大宮公園駅前は何処かローカル線の雰囲気漂っていた。集合時間の11時には、ほぼ参加者10名全員が揃った。週刊天気予報では10月25日（土）は雨となっており心配していた。が、当日は曇り時々薄日が射していた。石井会長より「今日一日怪我の無い様、楽しく過ごしましょう。」との挨拶の後、今回の企画立案者の筑井さんからコース説明があり、出発。

踏切を渡ると雰囲気が変わった。高級住宅地である。一区画の宅地面積が広くゆったりとしている。道順に「芙蓉園」「清香園」「蔓青園」を訪れた。「清香園」では盆栽教室が行われていた。生徒さんは中高年で10名中8名が女性だった。見事に手入れされた盆栽の数々を拝見しながら、我々「法政むさし野会一行」も盆栽についての説明、ノウハウに耳を傾けた。盆栽の寿命は数百年から稀に千年を超えるものもあるそうだ。気の遠くなる話である。ここ大宮に盆栽村を作った理由は、関東大震災（1923年）で大打撃を受けた都内の盆栽職人達が、震災を避けて移り住む土地を関東一円隈なく探した結果で、決め手となった条件は豊富な地下水と植木に合う赤土だったそうだ。最盛期には30軒以上もの盆栽園があったが、今では6軒しかないそうである。説明してくれた男性はNHKで「趣味の園芸」をコーディネイトしている山田香織さんのご主人であった。

大きな盆栽に圧倒された後、同じ盆栽村にある「楽天漫画会館」を訪れた。漫画家の先駆者北沢楽天の愛用の遺品の品々とユーモア溢れる傑作作品を見学。明治・大正・昭和と激動の時代にユーモアで生計を立てた。いったいどういう価値観の持ち主だったのだろうか？ と興味が涌いた。

昼食は盆栽四季の家の大広間で各自持参の弁当を四方山話をしながら取る。話の中で、今回の勉強会は榊原さんによる方丈記（鴨長明）、日時は2月21日（土）と決まる。また、もう1つの題は、「繁栄する社会の影で自殺者が10年以上に亘り3万人を超えている。これは何処に原因があるのか？」について、参加者でフリーディスカッションすることになった。

午後は、「埼玉県立・歴史と民俗の博物館」を訪れた。水口さんと言う女性学芸員に20分間ほど大宮公園の故事来歴についてご説明をいただく。その説明によると江戸時代には公園と呼ばれるものは無かったそうで、明治になってから西洋文化と共に公共の広場が確保造営されたとのこと。その主な場所は神社が所有していた広大な敷地であったそうである。大宮公園は県内では4番目に古い公園と言うことであった。当時の公園は今で言うデズニーランドのようなところで、遠くからの来客も多く、東京在住のかの森鷗外や夏日漱石などもやって来たそうである。園内にはお休みどころが数箇所有り、その賃貸料を公園の造園に当てていた時期もあったということ。



清香園でお話を聞く

ご説明を拝聴後、館内の催し物や陳列品を觀賞そして広大な大宮公園を散策した。

今回の企画は、身近であってもなかなか個人では訪れない、見過ごしている興味深い場所の探訪であった。有意義な秋の一日を法政の校友と楽しく過ごせた事を武蔵野国一ノ宮・氷川神社に感謝、拝礼して解散した。

（文責 石井）

## 「法政大学を卒業して」

2007年 法学部法律学科卒業 堀家隆房(毛呂山町)



晴れて法政大学卒業生の仲間入りをしたわけですが、せっかくこうした機会を与えていただいたので、ここではその感想というか、個人的に為になったなと感じた事についてお話ししたいと思います。

今更ながら、通教部とは実に「賑やかな場所」だったんだと思います。

口頭試問のために久しぶりに訪れた富士見校舎や卒業祝賀会々場で、同じ法学部だけでなく他学部の方とも交流する機会があり、そのことをあらためて認識しました。ここには「各世代の…」といってよい程の年齢の幅と多様なライフスタイルを持つ個々人が集っていました。そして、こうした個性が集まるからこそ生まれるある種の幅や多彩さは、同世代だけで構成される学習環境とは違い私にとっても貴重な経験をもたらしました。例えば、学説上の論点について疑問が生じたような場合です。ご承知のように、ここでは四年生まで自動的に進級していきますから、同じ学年、教室に習熟度のまったく違う学生が混在することは別に不思議な事ではありません。その折、知識豊富な先輩学生からももらった助言はとて有難いものでした。しかし、時が経って自分からアドバイスする機会が多くなってくると、この環境は両者にとって意義深いものなんだと感じるようになりました。

誰かに自分の知識や考え方を上手く伝えようとするには、ある程度、相手方の経験や考え方を理解した上で自分の知識を表現する必要があります。でも、それが一度は自己の中に取り込まれていた知識や考え方という名の「言葉」たちにちょっとした刺激と変化をもたらすんですね。つまり聞き手の特徴に配慮した表現は、それまでの思考の経路とは違う道筋を歩むようになって、自分でも気付かなかった視点や論点と対峙しはじめるのです。そして、妙な表現になりますが「いつもとは違った環境に置かれると言葉も成長する」みたいで、試練に耐えた「言葉」たちは、未だ知識のまま熟成中のものに比べると、さすがに逞しい感じです。

さて、そんな私が卒論のテーマに選んだのは「インターネットと表現の自由」でした。とても「ベタなテーマ」ですが、こうした「言葉」たちが凝縮されていて自分なりに気に入ってはいます。ただし、表題そのままに全く絞りをかけないで論じたため、やたら分量があって読み手に忍耐とか寛容さとかを要求するものになってしまいました。口頭試問の際、私の卒論を担当してくださった先生は「その方が、読み応えがあって良いよ♪」と笑っていらっしゃいました。ほんと、自分が思っていることを、そのままに伝えるのは難しいなと思います。ですから、その内容について、お話しするのは止めておこうと思います。

その代わりとってはなんですが、最後に私が法政大学に入学する前から好きだった「言葉」を紹介したいと思います。これは卒論の冒頭部分でも引用した言葉で、とっても有名なものなのでご存知の方も多いかと思います。それは「I disapprove of what you say, but I will defend to the death your right to say it, was his attitude now(彼の態度を観ていると《あなたの意見には反対だが、あなたがそれを言う権利を、私は生命を賭して、なお擁護するだろう》といわんばかりだ)」という言葉です。1906年にS・G・タレントアイアが著書「ヴォルテールの友人たち」の中で、フランスの啓蒙主義を代表する思想家ヴォルテール(Voltaire, 1694-1778)について述べたものです。

# 一日本語教師のベトナム滞在記

影山五月(所沢市)

☆☆

雨季とは言え連日30度を超すベトナム・ホーチミン・タンソニアット空港に2007年9月4日に降り立った。成田から約6時間の飛行時間だ。一度も訪れたことのないこの国への不安は不思議なことに赴任前からなかった。長年の夢であった海外で日本語教師として働くのも2番目の国となった。

ここでは専門的な日本語教育についてではなく、私の年代より上の方々にとって、真っ先に思い浮かべるであろう“ベトナム戦争”後の今のベトナムの現状を私なりに思いつくままに書いてみたいと思う。

ベトナムには多くの国が80年代後半頃から投資しているためか、ホーチミンもダナンも活気のある街に感じられた。(私はHCMに7ヶ月。ダナンに6ヶ月滞在した。)平均年齢が30歳ということなので、若者の元気な姿が目につく。騒音には無頓着な国民性か、夥しい数のバイクの数と車のクラクションにただ驚くばかりであった。やたらビービー鳴らすのは、「どいて! どいて! 先に行かせて!」という意味でもあるらしい。

何しろ優先順位は「車」「バイク」「自転車」「人」である。轢かれ損にならないようにバイクの波をかわす術も一月で覚えた。バイクはベトナム人にとっては必需品。交通手段はもっぱらバイクが主流である。経済の発展と共に車の数も年々増えているそうだが、まだまだ贅沢品である。

1975年4月30日、解放軍の戦車が当時の大統領官邸に無血入場して、ホーチミン(当時の呼び名はサイゴン)は陥落した。(注:陥落はベトナムでは禁句である。「サイゴン解放の日」と言う。)あの時の映像を多くの人がまだ鮮明に覚えておられるであろう。今はその建物は統一会堂と呼ばれて連日、観光客で賑わっている。私も着任そうそう出かけていった。広い敷地には当時の戦車や飛行機などが展示されている。

中に入ると当時の様子が感じられた。地下に降りると、迷路のような狭い廊下の向こうの部屋に暗号読解機、ベトナム全土の地図、司令室などが当時のままで残っている。屋上にはヘリポートがありヘリコプターが展示されている。解放軍が迫ってきたのを察知し、ここから多くの人が脱出したのであろう。私はホーチミンでベトナム人の家に7ヶ月下宿生活をした。そこの主人はかつての北ベトナム出身の人であった。公務員のためか生活は比較的裕福に感じた。

ここでベトナムの嫌な部分を書かねばならない。公務員の「賄賂」の世界についてだ。ベトナムで仕事をしたり、長期で滞在した人などは経験されたに違いない。テト前の時など、数百メートルおきに警察官が取締りをしている。小遣い稼ぎである。違反をしたかしないか定かでないが、呼び止められたらその場で警察官にお金を払うのである。バイクに日本人が乗っている場合、10万ドン(約650円)の相場が一気に30万ドン(約1950円)に跳ね上がるそうだ。ここでも日本人は金持ちだ。(?)

日本人に限らず、長期滞在外国人がベトナムを出国する時、暗に税関に賄賂の要求をさ



れ、とても嫌な思いをする。ベトナムの発展にブレーキがかかるとしたら、この「賄賂」の世界が蔓延していることであろう。一般の人たちにも「賄賂」が悪いという意識がない。それが問題である。

ベトナム戦争から30年以上が経って、サイゴン（現：ホーチミン市）もアメリカ軍の拠点であったダナンにも当時のものを感じさせられるものはほとんど見当たらない。戦争で負傷した人などはどうしているのであろう。家族主義の強いベ

トナム社会なので、一族の富むものがサポートしているのであろうか。

日本でも有名なシャム双生児の「ベトちゃん、ドクちゃん」のドクちゃんに会う機会があり、戦争のもたらしたものを深く感じた。彼のパートナーは私の勤務する学校で日本語を学んでいる。ドクちゃんは明るく、日本語も上手な青年であった。（兄は昨年10月に亡くなった。）

街の中心近く、3区の「戦争証跡博物館」を訪れると当時の生々しい悲惨な状況を目の当たりにする。枯葉剤が原因で生まれた奇形児のホルマリン漬け、数々の拷問で知られる捕虜収容所が再現されている。目を覆うような拷問の仕方が詳しく書かれていた。一気に暑さを忘れてしまった。ベトナムではこの博物館を是非訪ねてほしい。

ベトナムはまだまだ貧しい国だ。当時はもっと貧しかったであろう。何もなくても人はのんびり米を作り、豊かな自然の恵みの中で暮らしていたに違いない。あの戦争は単に大国のエゴだけだったのであろう。

1975年、南北は一つの国に統一された。しかし、水面下では北部、中部、南部と、人も気候も異なる。複雑な差別があることも確かである。それでもベトナム人はしたたかである。当時のアメリカ軍が落とした爆弾の破片や砲弾、ヘルメットなどを商売にしている。ベトコンが掘ったトンネルまでもが観光資源になっている。

一般のベトナム人は親日家であると思う。と同時にアメリカ人やフランス人をあまり嫌っているように思えない。心の中では決して戦争や長い搾取の歴史を忘れてはいけないであろうが、南の国特有で「寛容」な国民性なのかもしれない。

13ヶ月の私のベトナム滞在。まだまだ書き足りないことばかりである。再度訪れることもあるであろう。その時あの古い町並みは東京のように様変わりしているかもしれない。

---

## 「奥の細道」を旅して（第1回）

鳥海美智子（さいたま市）

---

中学時代、教科書の「奥の細道」を丸暗記することが夏休みの課題であり、毎日、お経のように誦じた。

その淀みのない名文は憧れであり、一度は行きたい場所となった。このたび念願かない月に一度、2年かけて「奥の細道」を断片的につなぎながら芭蕉を追った。

芭蕉が元禄2年（1689）3月27日（陽暦5月16日）、2400キロメートル、約150日間、家も捨

## 次回の勉強会 『方丈記』を読む ほか

場所：さいたま市民会館うらわ605号室

日時：2009年2月21日（土）2時～5時

第一部 『方丈記』を読む 講演者：榊原洋子さん

「行く河の流れは絶えずして……」で始まる『方丈記』は、鴨長明自身の隠遁生活の実相が描かれています。長明が隠遁者となり「方丈記」を著した当時の時代背景と長明が隠遁生活から得た心の安らぎとはなんであったのか？ を考察したいと思います。

第二部 皆の意見を聞いてみよう

- ・ 毎年3万人を超える自殺者は何故か？（参加者のフリーディスカッション）。

\*参加の申し込みは、はがき、電話、Eメールで、会長（石井）まで連絡ください。

\*申込締め切り：2009年2月9日

\*役員会を12時30分よりロビーで開催いたします。（詳細は別紙郵送）

て、命を賭して旅に出かけたのは46歳の時だった。寛文12年(1672)、29歳で故郷伊賀上野を発って江戸に向かった芭蕉は8年後に住居を深川に定めた。当時は文人が隠棲するのにふさわしい水郷情緒豊かな土地であったと思われるが、現在は商工業地であり、景色は一変している。

芭蕉稲荷は大正6年、津波が来た折りに芭蕉が愛蔵した石造りの蛙が発見され、芭蕉庵のあった地と決められて、昭和30年に復旧された小さなお社であり、その石蛙は芭蕉記念館に展示されていて、風格のある蛙であった。

深川の杉風の別宅から船で隅田川を上り、千住で見送りの門人たちと別れを惜しんだ。

草の戸も住み替わる余ぞ雛の家  
行く春や鳥啼き魚の目は泪

室の八島とは栃木市惣社町にある大神（おおみわ）神社で、煙に関する和歌の歌枕である。芭蕉のこの旅の重要な目的のひとつは歌枕の地を訪ねることであり、この神社はその当時の面影を色濃く残した貴重な場所であった。

日光では大谷川沿いに芭蕉を追った。

大日堂跡、裏見の滝、含満ヶ淵は東照宮に隠れた裏の顔であったが、苔むした石仏が並び、遠く過ぎ去った時代がそのまま残っていた。

稲荷神社の境内に西行戻り石という大石があった。文治2年（1186）、大和奈良の東大寺再建の基金集めのため、奥州平泉に旅した帰路、日光に立ち寄った西行は69歳であった。芭蕉は500年前の西行を追い、私は300年前の芭蕉を追う旅となった。

あらとふと青葉若葉の日の光

■訂正■ 前号（31号）の新入会員の氏名を訂正します。（正）堀家隆房さん（誤）堀家淳一さん

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。新入会員、堀家隆房さんの文章は、言葉に対峙する態度が曖昧な私には“ガツンと一撃”でした。本年も皆様にとりましてよい年であることを確信しております。（鳥海）